

「噛みつくやうに」の意味

中野伸彦*

The Meaning of “Kamitsukuyōni”

NAKANO Nobuhiko*

(Received September 29, 2023)

芥川龍之介作の「羅生門」の中に、下人の老婆に対する発言に関して、「噛みつくやうに」という表現が用いられているところがある。現代語の「噛みつくやうに」は、他に対して攻撃的な様子を表す表現として用いられることが一般的かと思われるが、近代の「噛みつくやうに」は、現代語とは異なる意味を表していたと考えられる。本稿では、近代の「噛みつくやうに」の用例をもとに、かつては、「相手としっかりつながるやうにする様子」を表す喩えとして用いられていたのではないかとすることを述べるものである。あわせて、比較的最近においても、近代と同様な意味で「噛みつく」という比喩が用いられた例があることについても述べる。

一 はじめに

芥川龍之介作の「羅生門」に、下人から老婆への発言に関して、「噛みつくやうに」という表現が用いられている（ただし、一九一五年の初出誌・一九一七年の単行本『羅生門』では、この表現はなく、一九一八年の単行本『鼻』に収められた際に付け加えられたもの）。

1 「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな声で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと思ひまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ。」（『芥川龍之介全集』第一巻〈岩波書店〉、153頁）^①

現代語で、「噛みつくやうに」が用いられた例を見ると、一般的には、

次の例のように、他に対する攻撃的な言動に用いられている。

2 「これは誰かが死ぬというお告げなんじゃないかしら？ これから死んでいく誰かのために、そのままに、精霊を送ってやっているのかもしれないわよ」

と、これは信子だ。

もちろん、本気でいつていっているのではないだろう。ニヤニヤと笑っていた。しきりに金口のウェストミンスターをふかしながら、なんだか皮肉っぽい、おもしろがっているような顔つきになっている。

「何をいうんだ。そんなバカなことをいうんじゃない」

稔が噛みつくやうにいった。横にいる夕子が飛びあがってしまうほどの大声だった。（山田正紀『灰色の柩』〈祥伝社文庫〉、88頁、一九九〇年）*

精霊を送る西方舟が燃やされるという変事が発見された場面

* 山口大学教育学部 〒753-8513 山口市吉田1677-1, n.nakano@yamaguchi-u.ac.jp

3 「あんなガキども、殺されればいいんだ」

スミスは噛みつくように言つて、土に唾を吐いた。

他の面々もどう反応したら良いのかわかりかねた表情をしている。少なくとも僕は混乱していた。スミスのように、ナチス支持者など赤軍に惨殺されればいい、当然の報いだと思いたい気持ちと、僕らを頼ってきた人間を邪険にしているのか、という気持ちと。(深緑野分『戦場のコックたち』)

〔東京創元社〕、283頁、二〇一五年〕*ドイツ軍の捕虜になっていたアメリカ軍の従軍牧師・軍医が、ヒトラー・ユーゲントの子どもたちを伴つて、アメリカ軍のもとに逃れてきた場面

4 だいぶたつてから、それまで観客のほうを向き、口角を動かして志願者に話しかけていた船乗りが体を半分まわして、あいかわらず志願者に目をやらず、噛みつくようにいきました――

「なにを待ってるんです？ あとがつかかえてるんですよ。(略)」

(略)

「さあ早く」と、軍事教練の教官を思わせる口調で船乗りが叫びました。「突き刺すんです」(ロバート・エイクマン 中村融訳『剣』『夜の夢見の川』(創元推理文庫) 236頁、二〇一七年) *シヨーへの観客からの登壇者として志願した男が、役(壇上の女性を剣で突き刺す)をなかなか果たそうとしないでいる場面

このような現代語の状況からすれば、「老婆の襟上をつかみながら」『噛みつくやうに』という、闘争心、敵意を丸出しにした態度(笹淵(一九八二))のような捉え方がなされるのももつとではあるが、近代の「噛みつくやうに」が、現代と同じように使われていたのかは、確かめる必要がある。

二 近代の「噛みつくやうに」①

近代の「噛みつくやうに」の用例を見てみると、次のように、現代語と同様な用いられ方をしていると見ることのできる例もある。

5 何でも私が人伝に承はりました所では、初めはいくら若殿様の方で御熱心でも、御姫様は反つて誰よりも、素気なく御もてなしになつたとか申す事でございます。いや、そればかりか、一度などは若殿様の御文を持つて上つた私の甥に、あの鴉の左大弁様同様、どうしても御門の扉を御開けにならなかつたとかございました。しかもあの平太夫が、何故か堀川の御屋形のを仇のやうに憎みまして、その時も梨の花に、うらうらと春日

が匂つてゐる築土の上から白髪頭を露して檜皮の狩衣の袖をまくりながら、推しても御門を開かうとする私の甥に、

「やい、おのれは昼盗人か。盗人とあれば容赦はせぬ。一足でも門内にはひつたが最期、平太夫が太刀にかけて、まつ二つに斬つて捨てるぞ。」と、噛みつくやうに喚きました。(芥川龍之介「邪宗門」『芥川龍之介全集』第四卷、19頁、一九一八年)

6 「(略)あの下座へ噛み付くやうに怒鳴つた染丸の態度は悪いと思うな」(正岡容「寄席鼈夜」『完本 正岡容寄席隨筆』(岩波書店)、295頁、一九四〇年) *染丸の嘶の途中で、弾いていた下座の三味線の糸が切れた際、染丸が下座の女性を「オイお前、肝腎のところで糸絶らしたら仕様ないやないかド阿呆」と、「口ぎたなく怒鳴っている声が」「客席の方まで聞えて来た」ことについて、正岡が松鶴に言った言葉

しかし、一方で、他に対して攻撃的な様子を表しているとは見がたい例もある。

7 庇の下には妻の小夜が、下半身を梁に圧されながら、悶え苦しんで居つたのでございます。(略) その内にふと気がつきますと、どこからか濛々とした黒煙が一なだれに屋根を渡つて、むつと私の顔へ吹きつけました。と思ふと、その煙の向うにけたたましく何か爆ぜる音がして、金粉のやうな火粉がばらばらと疎らに空へ舞ひ上りました。私は気の違つたやうに妻へ獅噛みつきました。さうしてもう一度無二無三に、妻の体を梁の下から引きずり出さうと致しました。が、やはり妻の下半身は一寸も動かす事は出来ません。私は又吹きつけて来る煙を浴びて、庇に片膝つきながら、噛みつくやうに妻へ申しました。何を？ と御尋ねになるかも存じません、いや、必御尋ねになりませう。しかし私も何を申したか、とんと覚えてゐないのでございます。唯私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた」と一言申したのを覚えて居ります。私は妻の顔を見つめました。(芥川龍之介「疑惑」『芥川龍之介全集』第四卷) 280頁、一九一九年)

地震で倒壊した家の下敷きになった妻に夫が語る様子を「噛みつくやうに」と述べている。具体的に何を言ったのかは明らかにされていないが、妻を思いやる言葉か何かを言ったのであり、攻撃的な言葉ではなかつたらうと推測される。

8 「偽物いかに現るとも、急所をきわむれば、鑑別のこといと容易なり。

御当家に伝わるこけ猿の壺には……」

一風宗匠の筆が、そこまで動いたとたん！

大勢あわただしい登音が、殿様をさがすように長廊下を近づいてきて、

「殿！ こちらでござりますか」

かんじんのところへ心ない邪魔が……対馬守は声をあらげて、障子そとの廊下へ、

「治太夫か。何じゃ、そうぞうしい！ いま宗匠と重要な筆談をかわしておる。さがつておれッ」

治太夫と呼ばれた侍の声で、

「いえ、殿。至急お耳にいれねばならぬことが——」

「エイトツ、さがれと申すに。そつちよりこつちがたいせつじゃワ——宗匠、そのさきはどうした」

と対馬守、必死に一風に書きつづけるようながしますが、老宗匠の筆は、そこでハタと止まってしまつて、キョトンとした顔をあげている。

気がついた対馬守、

「オオ、そうじゃつたナ。いかに大声を出しても、言葉は通ぜぬのじゃつたナ。エイトツ、世話の焼ける老人じゃ」

「殿、殿！ 火急の儀にござりますれば……殿、殿ッ！」

「うるさいッ！ このほうがよっぽど火急じゃッ」

と癩癩を起こした対馬守、いきなり宗匠の手から筆を引つたくつて、ドリと墨をつけるがはいか、膝先の畳の上へ、手習いのような文字を書いた。

「宗匠、それからどうした。こけ猿の壺には、どういう目印があるというのだ」

とこう滅茶苦茶に書き流して、ボンと筆を投げすてた。

一風宗匠は、すこしも動じません。それどころか、袋のような口で小さなあくびをしたかと思つと、手をふつた。めんどろくさそうに、眉をひそめた。

もうやめた、今日はもうあきらめたから許してくれ、またこんど、気分

のよいときに……そう言っているのだ。

いらだち切つた対馬守は、声の通じないのも忘れて、宗匠の耳へ噛みつくように、

「イヤ、わしが悪かつた。畳へ字など書いて、宗匠をおどろかしたのは、

なんともはや申し訳ない」

一生懸命の対馬守は、宗匠の前に両手をついて、つづけさま頭をさげながら、

「サ、こんなにあやまるから、機嫌をなおして先をつづけてくれぬか。ちよつとでよいから、その真のこけ猿の目印というのを……」（林不忘『丹下左膳』（五）日光の巻（山手書房新社）、187頁、一九三四年）

対馬守が、本物の「こけ猿の壺」を見分けるための目印を一風宗匠に教えてもらおうとしている場面である。機嫌を損ねたかと思つた対馬守が、お詫びをする言葉を「噛みつくように」言うのであるのが、これも攻撃的なものではない。

他にも、以下のように、他に対する攻撃的な言動でない場合にも「噛みつくように」は用いられている。

9 すると今まではつきりしなかつた鐘の銘も、だいぶんはつきりして来た。吉彦さんがちよつと読んで見て、

「こりや、お経だな。」

といった。それからまた、

「安永何とか書いてあるぜ。こりや安永年間にできたもんだ。」

といった。すると、どもりの勘太爺さんが、

「そ、そうだ。う、う、おれの親父が、う、う、生れたとしにできた、げな。お、お、親父は安永の、う、う、うまれだ。」

と、かみつくやうにいつた。（新実南吉「ごんごろ鐘」『校定新実南吉全集』第二巻（大日本図書）、91頁、一九四二年）*供出される鐘を洗い、見えるようになった銘を読んでいる場面

10 「略 僕にとつて我慢ならぬのは、その月尾寒三の野郎です。よろしい、僕は決心しました。これから倶楽部へ行つて、月尾寒三をのしあげて、今福嬢を奪還します。ではいづれ後で……」

「えつ、それは待つた。もしもし。もしもし……」

探偵は送話口に噛みつくように叫んだが、安東の返事は遂になかつた。

（海野十三「心臓盗難」『海野十三全集』第12巻（三二書房）、41頁、一九四七年）*思う女性（今福嬢）を奪うため、恋敵のもとへ行こうとしている安東を探偵（袋猫々）が止めようとしている場面

11 「失礼ですが、お嬢さん。安彦兄さんが犯人を知っていると仰有るのは、証拠があるのですか」

「ございます。ハッキリとした証拠が」

美津子の澄んだ目は、きびしく巨勢に向けられていた。

「安彦兄さんが応召したのは、昭和十七年の一月末。ちょうど大兄さんと坊やが殺された日から一週間目でございます。(略) 出征の前夜に、安彦兄さんは遺品として、先程御鑑定を願いました手型と、もう一つ、ひそかに私をよび寄せて、一冊の日記帳を手渡しました。昭和十七年度の日記帳でございます。自分が戦死の暁に中をあけてみるように、といひ含めまして、包み紙のようなもので、幾重にも、ていねいに、堅く包んで、封印されておりました。この包み紙の表に、マルコ伝第八章二十四という謎の一行が、大きく、ハッキリ書いてありました」

(略)

「お嬢さんは、日記をあけてごらんになりましたか」

「それをあけて、見ておれば、今さら、こんな不安な思いに悩む筈はございません」

そう答えて、しばし力なく茫然たる様子であったが、

「先程も申しあげました通り、遺品の手型はカトリック大辞典にはさんでおきました。日記帳の包み紙は、事重大と思ひまして、特に私の机のヒキダシへ隠しておきました。ところが昭和十九年末、空襲の気配も近づきまして、荷物だけ田舎へ疎開という時に、机のヒキダシをしらべますと、この日記帳の包み紙がなくなっております」

「日記帳の話を誰に洩らされたのですか」

「私は誰にも洩らしません。又、兄さんも洩らしようには思われませんが、私なら、私だけよびよせて、ひそかに托したのですから。けれども、一つ思い当りますのは、その晩は出征前夜で、兄さんは酔っ払っておりますので、内密話のくせに、声が高かったこと、もう一つ、兄さんが、毎日、日記をコクメイにつけていたということは、家内中誰知らぬ者がなかったのです」

「何とか伝の何章とかいう文句は、なんの呪(まじな)いの文句だい？」

定夫は妹に向って噛みつくように、きいた。美津子は答えようとしなかった。や、長い沈黙の後、巨勢博士がつぶやいた。

「人を見る、それは樹の如きものの歩くが見ゆ。という文句なんですがね。さアてね。余は犯人の姿を見たという謎ですか、どうか。それ以外に、考えようがないのかも知れませんか」

「フン」

定夫は呟いたが、そのふてぶてしそうな見せかけに拘らず、内心の驚愕は大きいようであった。そして、何かを、とりとめなく疑りだしてキリがないという様子でもあった。(坂口安吾「復員殺人事件」〈河出文庫〉、12頁、一九四九—一九五〇年) *倉田家の長男とその子供が轢死した事件の真相を、出征した倉田家の次男安彦が知っていて、出征前にそれについて記した日記を妹美津子に託したという話を美津子がする場面

以上見てきた、5—11の例に共通するものを考えると、強く脅す言葉(5)・強く叱る言葉(6)・強くお願いする言葉(8)・強く引き留めようとする言葉(10)など、その言葉をしっかりと相手に届かせようとしている場合と、話ができるのではないかと思われる。11についても、「内心の驚愕は大きい」話し手が、強い関心をもってしっかりと問いただしておきたい内容の質問であると言える。9についても、話し手が、しっかりと伝えておきたいと思つて口をはさんでいる様子があるように思われる。7については、内容が不明であり判断としないところもあるが、苦しい状況にある妻に何かをしっかりと言い聞かせる、あるいは、妻の意向をしっかりと問うておくといった発言であったのではないかと推測される。

この把握が正しければ、最初にあげた「羅生門」の例についても、「噛みつくやうに」は、「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ。」という言葉を、下人が老婆にしっかりと届かせようとしていることを表していると考えべきだということになるが、下人のこの後の行動を正当化する支えとなる重要な内容の確認を求める言葉であり、しっかりと届かせ、しっかりと確認しようとしたものとして描かれていると見て、矛盾はないであろう。

三 近代の「噛みつくように」②

前節で、言葉を発することについて「噛みつくように」を用いた近代の用例を見たが、「噛みつくように」には、言葉を発すること以外に用いられた例もある。

- 12 庸之助の病的な憤怒が絶頂に達した。激情で盲目になった彼は、もう口で喧嘩をしている余裕がなくなった。握りかためた両手の拳固が、二人の男の頬筋に、噛みつくように飛んで行った。(宮本百合子「日は輝けり」『宮本百合子全集』第一巻〈新日本出版社〉、165頁、一九一七年)

13 つやは恐ろしいまでに激昂した葉子の顔を見やりもし得ないで、おづ／＼と立ちもやらずにそこにかしこまつてゐた。葉子はそれが堪らない程癪に障った。自分に対して凡ての人が普通の人間として交らうとはしない。狂人にも接するやうな仕打ちを見せる。誰れも彼れもさうだ。医者までがさうだ。

「もう用はないのよ。早くあつちにお出で。お前は私を気狂ひでも思つてゐるんだらうね。……早く手術をして下さいつてさう云つてお出で。私はちやんと死ぬ覚悟をしますからつてね」

昨夜なつかしく握つてやつたつやの手の事を思ひ出すと、葉子は嘔吐を催すやうな不快を感じてかう云つた。汚たない／＼何もかも汚たない。つやは所在なげにそつとそこを立つて行つた。葉子は眼で噛み付くやうにその後ろ姿を見送つた（有島武郎『或る女』『有島武郎全集』第四卷〈筑摩書房〉440頁、一九一九年）

14 クリストフは我に返つた時、激しい憤りを覚えた。マヌースを殺したかつた。彼は停車場へ駈け出した。旅館の玄関はがらんとしてをり、街路はひっそりしてゐた。帰り後れた僅かな通行人等も、狂つた眼付をし息をはづましてる彼を、夜の暗みに見分けなかつた。彼は宛もブルドッグがその牙でかみつくやうに、自分の一念にしがみついてゐた、「マヌースを殺すんだ、殺すんだ……」（ロマン・ロオラン 豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』（四）〈新潮社〉、一九三三年、235頁）

15 とオルガは云ふと、いきなりまたハンカチを銜へて、甲谷の肩に噛みつくやうにつかまつた。これはをかしい。——甲谷はオルガの顔を見た。すると、もうさつと彼女の顔色は變つてゐた。いよいよそれでは発作が始まるのだ。と彼は思つた。（略）今となつてはもうオルガをしつかり抱きかへてゐるより、仕様がななのだ。（横光利一『上海』『定本横光利一全集』第三卷〈河出書房新社〉、223頁、一九三三年）

16 大聖寺平への斜面はアイゼンのツアツケが氷雪に噛みつくように素晴らしく利いて、一直線に下降した。（松濤明「春の遠山入り」『新編風雪のビューアーク』〈山と溪谷社〉85頁、一九四〇年）

拳固が相手の頬に（12）・オルガが甲谷に（15）・アイゼンのツアツケが氷雪に（16）、それぞれ密着する様子や、しつかりを視線でとらえている様子（13）、ある思いをしつかり保持している様子（14）を表すのに用いている。前節で述べた、言葉を発する場合とまとめて言えば、「対象としつかりつながるよう

にする様子」を「噛みつくように」は表していると言えるように思われる。（「噛みついた」場合、噛みついた側と噛みつかれた側はしつかりつながりを持つことになる、その側面をとらえて「噛みつくように」という比喩表現は用いられているということになる。）

四 終わりに

以上、「噛みつくように」は、かつては、「相手としつかりつながるようになる様子」を表していたと考えられるのではないかとこのことを述べてきた。

なお、この意味での「噛みつくように」は、現代では一般に用いられなくなつてきているように思うが、必ずしも現代において全く用いられないというわけではないかもしれない。少し以前の用例だが、次のような用例がある。「噛みつくような勢いで」の形の例であるが、しつかりと問いたださうとする場合に用いられた例であり、11と似た用いられ方をした例である。

17 愛想よく「バイバイ」などと言つていた春美は、警視が部屋を出た途端、隣に居た小山田さんに噛み付くような勢いで話し掛けた。

「ね、ね。ところでどうなったの？」

「検死の結果は正面から心臓を、多分ナイフだと言つてましたがね、二度刺されていたそうですよ。殆ど即死らしい。警察では物取りを目的とした通り魔殺人と見ているようですね。つまり我々五人がダンジョンに入るのを見て日本人観光客と思いついて来て襲つた。しかし声を上げられ、しかもすぐあのフランス人達が駆けつけたので刺して逃げた、という事らしいです。」（服部まゆみ『時のアラベスク』〈角川書店〉、54頁、一九八七年）

*春美が、自分たち一行が旅先のロンドンで遭遇した事件に対する現地の警察の捜査状況を、同じ一行の中で、警察から話を聞いて知っている小山田に尋ねる場面

注

（1）『芥川龍之介全集』は、一九九五～一九九八年に出版されたものによる。なお、用例の引用に際しては、振り仮名を省くなど、表記を変えたところがある。また、近代の用例の採取にあたっては、次を利用した。

・青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/>

引用文献

- 笹淵友二（一九八二）「芥川龍之介「羅生門」新釈」〔『国文学論集』山梨英
和短期大学創立十五周年記念〈笠間書院〉〕